

枝にもる朝日の影の少なさに涼しさ深き竹の奥かな

京極為兼

美しい一首である。ほそく細かな葉が幾重にも重なり合う夏の竹林。朝のしろい日差しが差し込んでくるが、深々と繁る葉に遮られ、何本かの光の筋が暗い空間に静かに差し込むばかり。仄暗い竹林の見えるような、見えないようなその奥に涼しい夏の空間が広がっている。こんな風景を私は想像する。

上句の清浄なあかるさと、下句の静謐な暗さ。夏の朝日の眩しさと、翳る竹林の奥のすずしさ。差し込むわずかな光によって、夜のうちには見えなかった竹林の抱く空間が読む者の胸にゆっくり展いてゆく。光と翳の構図。

鎌倉時代の終わり頃、それまでの和歌とは異なる新しい和歌を目指した歌人たちを京極派と呼んだ。その理論と実践において中心的役割を担ったのが京極為兼であった。

「ことばにて心を詠まんとすると、心のままにことばの句



いゆくとは、変れるところあるにこそ(言葉で心の中を詠もうとするのと、心に従って言葉が匂い出てゆくのは、違うところがあるのだ)と彼は主張し、これはそのまま京極派の基本的理念にもなった。言葉より心。心のためなら言葉が多少伝統の枠を踏み越えても構わないという立場を取ったため、既成概念に囚われない革新的な表現が次々に生まれることとなる。掲出歌の三句「少なさに」なども為兼の独創表現で極めて用例の少ない歌句。こうした「特異句」の多さも京極派和歌の特徴である。正岡子規の登場よりもさらに前、京極派の歌人たちは現代短歌に非常に近い表現を手に入れていたのだ。

余談だが、為兼の容姿について「見目悪き人なり」という記述が『正徹物語』にある。その説話では、容姿を理由に女房に誘いを断られてしまうのだが、持ち前の和歌のセンスで自分の容姿を逆手に取りながら粹な返歌を贈ってやりとりを楽しんでいる様子が描かれる。和歌だけでなく、男女の場面においても為兼は外見でなく「心」を重視していたのだろう。『玉葉和歌集』収載。(小島なお)